



県中いわて

令和元年12月1日 / 第249号

●発行／岩手県中学校長会 ●代表／小野寺昭彦（盛岡市立下橋中学校） ●事務局／〒020-0885 盛岡市紺屋町2-9（盛岡市勤労福祉会館2F）／電話019(622)0572 ●印刷／杜陵高速印刷／電話019(651)2110

第70回全日本中学校長会研究協議会 群馬（前橋）大会

《大会主題》

「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を創り出していく日本人を育てる中学校教育」

10月24日（木）25日（金）の2日間、「新たな時代を切り拓く人づくり 東国文化発祥の地 群馬から」の大会スローガンのもと、第70回全日本中学校長会研究協議会群馬（前橋）大会がベイシア文化ホール（群馬県民会館）等を会場として開催された。本県からの参加者24人を含む全国2,000人余の校長が参集し、群馬県中学校長会の心温まるおもてなしにより、和やかな雰囲気の中、協議や情報交換が行われた。

第1日の午前中は、開会式、文部科学省説明及び全体協議会が行われた。



【開会式挨拶：川越全日中会長】

開会式で、全日本中学校長会の川越豊彦会長は、「予測困難で変化の激しい社会にあっても、子供たちが変化の中からチャンスを見つけ、そのチャンスを活用し、活躍していくことができるような資質・能力を身に付けさせることが教育に期待されている」「子供たちに必要とされている資質・能力を身に付けさせることができるように、教師も変化し続ける社会に的確に対応できるように、必要な資質・能力を着実に身に付けることが求められている」「技術革新によってもたらされたシステムや環境等を私たちが質の高い教育活動を行うための支援ツールとして活用し、子供たちに明るい未来を創生する力を身に付けさせることが、学校と私たち全日本校長会に課せられた使命であり、そこに学校の存在意義がある」と述べた。

また、群馬県中学校長会会長の綿貫知明大会実行委員長は「こういう学校にしたい、という理想をもち、学校で学ぶ子供たちが、自分の心を正しく導き、

人生をより良く変えてほしいと願い学校経営を行っている」「子供たちはもちろん、それを導く先生方も自らの長所を伸ばし、エンパワーメントされる、そんな理想を語りたい」と述べた。

開会式後の文部科学省説明に続いて行われた全体協議会では、全日本中学校長会の笛木啓介生徒指導部長が「全日中教育ビジョンに基づく学校からの教育改革～いじめ問題による自殺根絶に向けての提言（生徒指導部の調査研究報告書を通して）～」と題し、続いて、島根県出雲市立第二中学校の伊藤成二校長が「明日も行きたい」と思える学校を目ざして～『自分株』を磨き『学校株』を高める』活動を通して～』と題し提案し、承認された。



【第8分科会】

午後からは、会場を分散し、8つの分科会で各々の研究題に係る各学校の特色ある発表があり、今後の在り方について活発な協議が行われた。第8分科会「地域との連携・協働による『チーム学校』の実現」では、大船渡市立末崎中学校の多田喜夫校長の司会のもと、大船渡市立吉浜中学校の村上誠校長が東北地区を代表して実践を発表した。

第2日は、伊勢崎市立第三中学校の生徒によるマンドリン演奏と合唱のアトラクションで始まり、続いて、大会宣言と決議が行われ承認された。その後、「自己点検のススメ」と題して、上毛新聞社に勤務経験のある作家の横山秀夫氏（『動機』『半落ち』『クライマーズ・ハイ』『64（ロクヨン）』等の著者）による記念講演が行われた。

閉会式では、大会実行委員長の挨拶、次期開催地である和歌山県の代表者の挨拶などがあり、充実した2日間の幕を閉じた。

第1分科会レポート

「カリキュラム・マネジメント」
の推進

和賀地区 柿崎 肇（江釣子中）



発表1 コミュニティ・スクールを基盤とした小中
一貫教育の推進を通して

（群馬県藤岡市立小野中学校長 吉崎 仁）

藤岡市内の各中学校区に小中合同の学校運営協議会を設け、以下の2点に重点を置き、児童・生徒によりよい社会を創り出すための資質・能力を育む教育の在り方についての発表であった。

- ① 確かな学力を育む小中連携と授業改善・カリキュラム作り
- ② 学校、家庭、地域の協働に向け、教育課程の見える化と組織作り

学習スタンダードや各教科の学習系統表を作成し、9年間の学びの連続性を意識した実践と、学校運営協議会にて学校、家庭、地域の役割を明確にした、アクションプラン作りを通し、「持続可能な組織運営」を図っている実践に学ぶところがあった。

発表2 支援教育の視点から人とのふれあいを大切にする教育活動の充実を目指して

（神奈川県相模原市立新町中学校長 上西 雅己）

ユニバーサルデザインやインクルーシブ教育を推進し、理解力に課題のある生徒も学習能力の高い生徒にも成就感と自己有用感を得ることができる教育課程編成の在り方を求めた実践発表であった。

- ① 見通しや課題設定の仕方等に加え、「分からない」が言える学級作りに視点をあてた授業づくり
- ② 学校と家庭・地域が一体となった教育活動
 - ・ 子供未来ワールド（青少年指導員主導）
 - ・ 東北修学旅行（農業体験・防災教育）
 - ・ まちづくりサミット（地域・安全づくり）

等、生徒の抱く課題を自ら解決させる支援を行い、自信をもたせ、学力、協働力をつける実践であった。

これらの活動を支える家庭・地域の力の必要性はもちろんであるが、何よりも多くの方々と直接関わる教職員の理解と主体性を育むことが大切だと感じさせられた。今後の学校経営に参考にしたい。

第2分科会レポート

「主体的・対話的で深い学び」
の実現

岩手地区 伊藤喜代美（安代中）



発表1 協同的な学びを通して育てる学力と人間力
（鳥取県伯耆町立溝口中学校長 山本 泰）

鳥取県の発表は、「主体的・対話的で深い学び」の視点から理論的な指導を中京大学杉江修治教授に仰ぎ、「協同学習」を研究主題に、10年にわたる学習過程の改善に取り組んだ事例発表であった。

主題に迫るために、①協同学習のイメージを教員間で共有②協同学習的「学習規律」で授業の雰囲気づくり③ねらいとゴールの一本化④教師の気持ちを抑え、生徒が得意顔をする、生徒が協同する授業づくりなどの具体的取組を確認し、「協同学習」実現に向けた具体的な取組により、研究主題に迫る授業の在り方が、考え方・原理として定着してきていることが成果として報告された。協議を通して、新指導要領の理念の確かな理解と様々な授業実践が授業改善につながる事が確認された。

発表2 論理的に思考し表現する力を育成する教育課程の在り方

（広島県福山市立鷹取中学校長 藤田由美子）

広島県の発表は、学習の定着度が低く、生徒の自己有用感にも課題があった中学校で、「物事を論理的にとらえ、他者の意見や考えを聞き取る力、他者に説明できる力の育成」を目指し、教科指導を軸とした取組、改善を図った実践の発表であった。

「カリキュラムマップ」「まなびの地図」「単元のルーブリック」など、学ぶ内容、ゴールを生徒に明確に示すことが、意欲を高めることにつながることを具体的な資料をもとに示された。また、授業においては、論理的な思考を育成するための様々なツールの活用や学校として確立された授業スタイルの下敷きなど、具体的に示され、とても参考となるものであった。

協議においては、「主体的で対話的な深い学び」の取組についての実践交流が行われた。

第3分科会レポート

よりよく生きようとする意思
や能力を育む道徳教育の充実

盛岡地区 千田 幸範（城東中）



発表1 ものごとを多面的・多角的に考え、生き方
についての考えを深める道徳的な判断力、
心情、実践意欲と態度の育成

（北海道富良野市立麓郷中学校長 大角 勝之）

富良野市では、自他の肯定感を高めることを意図
した「ZERO運動」を6中学校で取り組んでいる。

いじめZERO運動と連携した道徳教育として、①
ZERO運動全校集会、②ありがとうカードやZERO
メッセージの作成、③いじめZERO宣言の実施。

地域の教育力を生かした道徳教育として、①心に
響く道徳教育、②コミュニケーションを学ぶ授業、
③地域と共に進めるボランティア教育の実践。

魅力ある教材との出会いを大切にしたい道徳教育と
して、①情報モラルの確立、②学校農園活動、③演
劇や森林学習を活用した実践が紹介された。

中学校区毎に参観日を活用した授業交流で教師の
授業力が高まった成果も紹介され、道徳教育を推進
する上で多くのヒントが得られた発表であった。

発表2 他の教育活動・働き方改革との関連を重視
した道徳教育の充実

（北海道稚内市立潮見が丘中学校長 塩崎 由雄）

従来、道徳的価値を自分事にまで高める指導に弱
さがあり授業改善の必要があったこと。また、働き
方改革の動向もあり、授業準備や研修にかかる時間
を最低限に抑えながら有効な手立てを模索する必要
もあったことから取り組んだとのこと。

昨年度は採択教科書を教員が何時でも手に取り見
られるようにするとともに、教科書活用と評価方法
に絞り実践研究を継続した。その結果、指導過程の
統一が進み、どの教員も一定レベルの道徳の授業を
進められるようになってるとともに生徒の意欲を引き出
す評価実践も見られるようになったという。質問紙調
査から、授業改善が進み、研修が充実し、生徒が変
容したことを数値で紹介する確かな発表であった。

第4分科会レポート

健康で安全な生活と豊かなスポー
ツライフを実現するための教育の充実

遠野地区 中野 善文（遠野西中）



発表1 「かけがえのないいのち」を守りきる、安心・
安全な学校づくりを目指して

（京都府京都市立高野中学校長 西田 育世）

子供の命を守りきることでできる「安心・安全な
学校」をつくるために、二つの視点で常に問い続け
た取組の発表であった。

視点1「からだのいのち」の取組は、①避難訓練、
②生徒主体の交通安全教室、③安全実地研修会、④
避難所設営研修会、⑤不審者対応研修会で、③と⑤
は小中合同で系統的な指導を行っている。

視点2「つながりのいのち」の取組は、①教育の
ユニバーサルデザイン（UD）化、②一人一人が徹
底的に大切にされる人権教育の二つである。校内で
新たにUD部を立ち上げたのが特徴である。

子供の「いのち」を守るために、常に問い続ける
こと、地域・小学校と連携して取り組むことの重要
性を改めて実感させる発表であった。

発表2 小中連携による体力向上の取組

（兵庫県尼崎市立武庫東中学校長 長田 光司）

研究指定をきっかけに、小中連携による体力向上
に二つの柱で取り組んだ発表であった。

柱1「学校行事」は、①体育大会、②クラブ体験、
③体育授業に小学生が参加し、中学生とともに運動
の楽しさを実感する取組である。

柱2「教科」は、体力運動能力調査の結果を小中
で共有し、保健体育の授業で系統的に指導する取組
である。持久走に重点を置き、中学校では授業の導
入で6分間のランニング、武庫東小学校では「武庫
東サーキット」、武庫庄小学校では中学校同様にラン
ニングを実施。3年間の取組により、中3は男女
ともに全国平均を上回り、1・2年は男女ともに全
国平均に迫る結果であった。

運動を楽しむ継続することで体力向上を図るス
ポーツライフの目指す姿を示した発表であった。

第5分科会レポート

社会的・職業的自立に向けた
キャリア教育と進路指導の充実

二戸地区 佐藤 純子（九戸中）



発表1 教育活動全体を通じた組織的・計画的な進路指導の充実

（熊本県芦北町立田浦中学校長 畑口 益喜）

全校生徒76名は、田浦小・中の9年間をほぼ同じ集団で過ごしている。単学級特有の人間関係の課題が時折見受けられることから、地域・学校の実態を踏まえたうえで、自立につながる指導を工夫する視点から計画を見直し、キャリア教育を進めていた。

6つの実践が紹介されたが、特に、職員の経験を活かした校務分掌の割り振りによる進路指導の充実、「田浦中スタイル（授業の統一事項）」の共通実践による授業改善と学力向上、月1回の定期連絡会をはじめとする小・中連携、管内中・高11校の管理職による情報交換会は、校長のマネジメント力とリーダーシップが発揮された取組だった。

母校で勤務し、「学校の一つ一つの取組は自立をゴールとしている」と訴え続けている校長だからこそできる、地域と学校をつなぐ実践であった。

発表2 「竹田郷土学」を柱に据えた、教育活動全体を通じた基礎的・汎用的能力の育成

（大分県竹田市立久住中学校長 渡邊 文也）

全校生徒56人の小規模校で、自分やまわりの状況を判断して適切に対応することができない、地元で生活しようとする生徒が大変少ないという実態から、教育活動全体をキャリア教育の視点で捉え直し、授業改善や地域の「材」を積極的に活用することで、基礎的・汎用的能力の育成を図った取組であった。

特に、「竹田郷土学」では、郷土の特長や郷土で暮らす人々の思いを知るとともに、生徒一人一人が自己の生き方や将来の在り方について考える機会が設けられており、学年毎に「ふるさとの歴史・自然・人」「ふるさとの産業」「ふるさと活性」をテーマとした学習が組まれ、それぞれに見合った地域人材の活用が行われているなど、地方の学校ならではのキャリア教育が展開されていることが発表された。

第6分科会レポート

自他を敬愛し他者と協働しながら自己
実現を図るための自己指導能力を育成
する生徒指導の充実

胆江地区 遠藤 宗俊（金ヶ崎中）



発表1 小さな成功体験を通じて未来を切り拓く生徒の育成

（徳島県吉野川市立鴨島東中学校長 三木 俊彦）

①吉野川市の子供たちの現状と課題

自己理解及び将来の夢目標については消極的な肯定が多く、一定の否定的回答もある。更なる成功体験を通して意欲的な取り組み意識が必要と考える。

②研究の実践

- ・意識調査 平成30年7月と12月 市内全生徒
- ・市内5校で「とことん続ける行動目標」の取組

平成30年9月～12月、生徒が日々の具体的な行動目標を設定、小さな成功体験を積み重ね、自己指導能力の向上に役立てる取組とした。

③研究結果より

- ・積極的な肯定の増加と自他の敬愛・他者との協働・自己実現には正の相関が明らかとなる「とことん続ける行動目標」取組は自己指導能力を育成し、「自己実現」への可能性を示した。

発表2 みんなが学校を創る主人公に

（高知県の町立神谷小中学校長 北澤 靖裕）

①児童生徒の実態

少人数であり、対立や衝突は避ける傾向。集団としての成長意識や自己肯定感が低いことが課題。

②実践概要

- ・児童生徒の情報共有 小中教職員の情報共有
- ・主体的・自立的活動保障 生徒会活動の活性化
- ・地域で学ぶ、地域と学ぶ、地域に学ぶ 地域連携
- ・菊池学園の取組 授業改善・価値語・ほめ言葉等
- ・行事振り返りシート 教師・生徒の成長確認

2つの研究実践から意識調査や実態の把握を丁寧に実施し、地域の各中学校や保小中の連携に共通の実践が進められることに大きな成果が得られ、積極的な生徒指導に大いに参考となるものであった。

第7分科会レポート

多様化する学校教育課題に
対応できる教員の育成

久慈地区 千葉龍太郎（大野中）

発表1 生徒や保護者・地域の信頼に応えられる教員
の育成と研修の在り方

（富山県高岡市立戸出中学校長 山森 義人）

現在、多様化・複雑化した学校教育課題に迅速かつ的確に学校づくりが求められている。そのため、個々の教員には、人間性や授業力・指導力等の実践的指導力に加え、複雑化・困難化する新しい教育課題に対応していくための資質・能力が必要となってきた。このような課題の育成を目指した各校の取組を基に研究し、人材育成の方策を探る研究であった。

「教員が成長する機会」として82%の校長が「授業研究など校内での研修」と回答しているのに対し、教諭は42%と大きな隔たりがあったのは興味深かった。教諭が「校務分掌、学年等の業務への取組」を自分の成長する第一の機会として挙げていた。理論的な研修だけではなく実務を通しての経験が成長につながることを実感した研究であった。

発表2 東海市校長会と市教育委員会との連携による
人材育成の取組

（愛知県東海市立名和中学校長 浜島 研一）

信頼され、専門性を身に付けた教員を育成することは校長の責務であるが、各校が独自でこの課題に対処するのは難しい。校長会が情報交換に努めることが不可欠であるが、市教委とも連携し、より効果的な資質向上への取組を探る研究であった。

授業オープン化週間の設定、校内自主研修会の開催、ICT自主研修会、ローテーションTT道德等、ユニークで参考となる具体的な取組が紹介された。

人材育成の重要性が高まる一方で、教員の「多忙化解消」「働き方改革」が求められている。勤務時間終了後等を使つての自主研修会等については、難しさを感じたが、校長自身が積極的なリーダーシップを発揮し、他校の優れた人材育成の取組を共有し実践することの大切を感じた研究であった。

第8分科会レポート

地域との連携・協働による
「チーム学校」の実現

気仙地区 松高 正俊（大船渡第一中）

発表1 復興・防災教育の実践と校長のリーダーシップ
（岩手県大船渡市立吉浜中学校長 村上 誠）

（司会者：大船渡市立末崎中学校長 多田 喜夫）

私たちの気仙地区中学校長会3年間の研究をまとめた村上校長の発表である。研究のねらいは、各校の特色を活かしながらの復興教育の検証と今後の推進について、校長として「チーム学校」をどのように組織し、リーダーシップを発揮していくかである。

研究内容は、①岩手の復興教育と関わって「いきる」「かかわる」「そなえる」の観点からの復興教育の実践、②校長のリーダーシップ、である。まとめとして、地区校長会として、「知」の共有ができたこと、教職員の資質向上に繋がったこと、校長の役割・影響の再確認ができたことなどが述べられた。

協議では、多田校長の司会により活発なものとなった。主な内容は、岩手の復興教育や実際に震災を体験している気仙地区の取組に関する内容が中心であった。発表者・司会者に感謝したい。

発表2 ミドルの職能育成と専門スタッフとの協働・
連携推進による課題解決

（山形県山形市立第九中学校長 草刈 竹司）

山形市内の校長が今年度末16校中7校退職すること、教職員の年齢が高くなっている現状から、40代教員（ミドルリーダー）を校長会として、どのように育成していくかについての実践発表であった。具体的実践として、①山形市中学校長会主催の春・秋の2回の教務主任研修会、授業力向上推進研修会（学習指導部長・研究主任対象）、生徒指導主事研修会開催による職能の育成、②各校における育成のための校長の具体的な関わり方、③民間講師による「ミドルリーダー育成」の研修等について発表があった。教育委員会主催でなく、校長会主催の取組という点で非常に興味深い発表であった。協議では、全国的に同様の実践例が発表された。

各地区校長会活動 **NOW**

盛岡地区校長会



人間性豊かな生徒の 育成のために

熊谷 司（飯岡中）

1 はじめに

盛岡市中学校長会は、岩手大学附属中学校（校長・副校長）を含めた、市内公立中学校24校25人で構成され、中学校を取り巻く諸問題について、その解決に取り組みつつ、人間性豊かな生徒を育成する中学校経営の充実に努める活動に取り組んでいる。

2 本年度の活動方針

- (1) 教育諸条件の充実に努める。
- (2) 会員相互に連携し、研修・親睦を図る。
- (3) 当面する教育情報の交換・提供を図る。

3 本年度の主な活動内容

- (1) テーマに基づいた研修会の開催

- (2) 県外先進校に学び、学校経営の充実を図る視察研修の開催
- (3) 教員指導力の育成と生徒の学力向上を図るための中学校実力テストの実施
- (4) 生徒の健全育成のための生徒指導情報交換と教職員の情報交換研修の実施
- (5) 中高（県立・私立・特別支援）連携合同会議・教育懇談会の開催
- (6) 中高教育条件の理解推進を図る、盛岡地区高校概要の作成

4 終わりに

盛岡地区校長会は、県中学校長会や県中文連・県中体連との連携の円滑化を図るように努めている。そのことが、会員相互の連携を深めるとともに、特色のある学校経営につながると確信している。生徒のための働き方改革や部活動指導の在り方等の教育課題を解決すべく、24校25人が、知恵を絞り、心を寄せ合い、「生徒の輝く笑顔のために」と活動を進めている。

釜石地区校長会



相互の連携を図り、 『生きる力』を育む。

菊地 正道（唐丹中）

1 はじめに

釜石地区には釜石5校と大槌2校の計7校の中学校及び学園があります。今年度は、RWC（ラグビーワールドカップ）2019が釜石鵜住居復興スタジアムを会場に開催され、復興に際した皆さんの支援をいただいた世界中の皆様に、様々な形で感謝の気持ちを示すことができました。

2 地区校長会活動方針及び活動の重点

- (1) 学校経営の充実と環境整備
 - ①国・県の教育動向の把握とその対応
 - ②教育課程の適切な実施と復興教育の充実
 - ③学力向上及び学校不適応問題等諸課題の解決
 - ④各種団体や関係諸機関との連携と支援要請
 - ⑤教育費・学校施設等教育諸条件の整備・充実

- ⑥『働き方改革』等勤務条件の改善への対応
- (2) 職能研修の充実と各種団体との連携
 - ①研修・研究交流の充実及び先進校視察の実施
 - ②学校公開研究会や各教育研究団体等への協力
 - ③小・中・高の連携と諸課題の解決
- (3) 会員相互の連携と校長会の円滑な運営
 - ①会員相互の連携強化と各組織の活性化
 - ②会報『海原』、研究紀要『潮騒』等の発行

3 主な活動内容

- (1) 1年に10回の学校経営研究会において、情報交換を行い、諸問題の課題意識を共有している。
- (2) 1年に2回中高連絡協議会を実施し、各校の課題や今後の取組等の情報交流を行っている。
- (3) 小中合同経営研修会の実施
- (4) 県小・中校長会研究大会釜石大会（令和4年）に向けての取組

4 おわりに

今までのRWCの取組の成果をそれぞれの学校経営にいかにして生かしていくかが来年度以降の課題です。これからもよろしくお願いいたします。